

料理レシピを通じた複言語・複文化教育

—「レシピのチュルク諸語」での実践報告—

日高 晋介(日本学術振興会 PD/新潟大学)

1. はじめに

「レシピのチュルク諸語」は、東京外国語大学が生涯学習の場として開設した TUFUS オープンアカデミーにて行われた、2023 年度夏期間の語学講座の一つである。この講座では、チュルク諸語を専門とする 3 人の講師が、少なくとも一つのチュルク諸語(トルコ語系言語)の学習経験を持つ受講者を対象として、各講師が専門とする言語で書かれた料理(下記写真参照)のレシピを題材にして演習形式の 3 日間の講座(一言語につき一日)をオンラインで行った。



パロウ (米料理)

地域: ウズベキスタン共和国

言語: ウズベク語



ベシバルマク (麺料理)

地域: キルギス共和国

言語: キルギス語



オシポシマク (パイ料理)

地域: タタールスタン共和国

言語: タタール語

2. 本講座の狙い

西山 (2010: 28) では、複言語主義が個人の言語体験に注目するものであり、個人においては複数の言語体験が相互関係を築き、相互作用のもとに共存することが指摘されている。複文化主義も同様に、個人の複数の文化的体験が個別的に並列されているのではなく、一つの統合された能力として機能する、とされている (西山 2010: 29)。本講座は、複言語・複文化主義の考えに則り、個々の受講生が、すでに習得している言語的な知識・能力と、生活に根差した調理にまつわる文化的経験を総動員してレシピを類推して読むという経験を通して、各言語間の類似・相違への気づきを楽しみながら新たな言語に触れるという体験を得ることを目的とした。

3. 実践

講師は、キリル文字を読めない受講生を想定して、ラテン文字転写したレシピ(ベシバルマク;キルギス語、オシポシマク;タタール語)を事前に共有した。さらに、受講生が予習する際の手助けとして、各言語の概説と語彙集も事前に共有した。

授業時には、まず講師が各言語の特徴について説明した後に、受講生一人一人が音読してレシピを読み、それを日本語に翻訳してもらった。これにより、受講生は、各言語の音の響きが体感でき、受講生の類推ではカバーしきれない部分を自覚することができる。そのほかに、受講生の学習経験のある言語を基準にして 20 名弱の受講生を 4、5 人に分けて、10 分を 1 ターンとしたグループワークを課した。まず 5 分の間に、レシピ中の 3~4 文を既修者が音読してから事前に共有した各言語の概説・語彙集と受講者の知識を用いて日本語に翻訳し、その他気が付いた点についても指摘する。その後、受講者全体に向けて各グループの代表者が自分のグループで読んだ文の翻訳と各グループで気が付いた点について発表し、講師がその場でフィードバックを与えた。音読と翻訳のタスクは一人でのタスクと同様の狙いがあるが、グループ内の個々人が持ち寄った知識による翻訳の検討を経ることで、自分の知識・経験からは考えられなかった視点や気づきを他者から得られる。さらに、各グループの発表によって、グループ内に留まっていた新たな視点・気づきを受講者全体で共有できる。ただし、グループワークでは、発表者の想定よりも時間がかかってしまい当初想定していたターン数をこなせなかった。これは本講座の反省点である。

4. 最後に

本講座では、「レシピ」と「チュルク諸語」を題材とすることによって、受講生同士の知識・経験を最大限に動員した読みを引き出し、各言語の類似・相違を身をもって体感してもらうことができた。それだけではなく、発表者が企画時当初に想定していなかった副次的効果もあった。一つは、受講生と講師とのコミュニケーションの中で、レシピからの文字情報だけでなく、標高などの環境やその国特有の材料などの言語外要因によっても料理の出来不出来が左右されるという気づきが得られたことである。また、本講義終了後にある受講生から「自分が学習した経験のある言語とは異なる言語も勉強してみたい」という感想をいただいた。これは受講者自身が本講座を通して学習経験のある言語を相対化できたことにより、他の言語への興味が掻き立てられたと考えられる。今後は、今回扱った以外のチュルク諸語も取り扱うことで、さらに複言語・複文化主義に基づいた教育を推し進めていきたい。

参考文献: 西山教行 (2010) 「複言語・複文化主義の形成と展開」細川英雄・西山教行編『複言語・複文化主義とは何か—ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』 22-34. 東京: くろしお出版.